

原著論文

受付：2009. 9. 9

受理：2010. 2. 18

介護現場における介護技術の習得状況  
－介護福祉教育における介護技術教育の検討に向けて－

武 田 啓 子

日本福祉大学 健康科学部

高 木 直 美

日本福祉大学中央福祉専門学校 介護福祉士科

A Research of Care Worker's Experience of Care Skills in Assisted-Living Facility  
Examination of Acquisition of Care Skills in Care Worker Education

TAKEDA, Keiko

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

TAKAGI, Naomi

Nihon Fukushi University, Chuo College of Social Services

**Abstract:** This study investigated the acquisition of the care skills in assisted-living facility to examine an ideal method of the "care skills" education of the care worker. As a result, it suggested that self-evaluation became good by experiencing it. For the care skill that self-evaluation is low, the device of the education is necessary. The acquisition degree of the fundamental knowledge is high. It is difficult to learn care assessment, but is important for learning a care skill. For the education of the care skill, the acquisition of the care assessment becomes important.

**Keywords:** care worker, care skills, care worker education, self-evaluation, care assessment

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

介護に携わる者の取得資格や教育内容は多種多様である中、より質の高い介護が求められ、介護福祉士養成課程では今年度から新カリキュラムが施行された。それに先立ち、平成 20 年 4 月に「新しい介護福祉士養成カリキュラムの基準と想定される教育内容の例」<sup>1)</sup> が掲げられ、表 1 の「資格取得時の介護福祉士養成の目標」が示された。しかし、旧カリキュラムの教育内容に対する課題が明確にされていない事や卒業

直後の技術能力に対する状況も不明確なことから、新たな教育の展開は、模索状態である。

看護基礎教育課程では、平成 15 年に文部科学省から「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」<sup>2)</sup> が出され、(1)学士課程全体を視野に入れたコア・カリキュラム、(2)学生の看護実践能力の質を保証するための仕組みづくりなどが示唆された。そして、平成 16 年に「看護学教育の在り方に関する検討会」から、看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標についての報告書<sup>3)</sup>が出された。それを

受けて、看護基礎教育において卒業直後の技術能力にも格差が生じている実情から、看護基礎教育における技術教育の改善を図るため、臨地実習において学生に実施させてもよい技術項目とその水準を分類し、教育指導の指針とすることとした。また、平成19年に、「看護基礎教育の充実に関する検討会」<sup>4)</sup>の報告の中で、看護師に必須の技術項目と卒業時到達度を明確にし、約140項目の技術につき、「単独で実施できる」、「指導の下で実施できる」、「学内演習で実施できる」、「知識としてわかる」まで4段階に必要な到達度を設定した。このような状況において、各看護系大学では、看護技術の習得と教育的介入のあり方を検討するために、看護技術の経験や達成度、自信度などに関する実態調査<sup>5) 6)</sup>が数多く報告されている。

それに対して、介護福祉教育課程では、学生に対する介護技術の実態調査の報告は少ない。また、勤務年数3年未満の介護職員と介護福祉士との比較調査<sup>7)</sup>にて、生活支援に対する自己評価は介護福祉士の方が低い、と報告されている。しかし、その実態や要因は明らかにされておらず、介護福祉士が卒業後どのように成長してゆくのか、介護現場での介護技術の習得状況を追った調査研究も少ない。

そこで、本研究は介護福祉士養成課程の「介護技術」教育のあり方を検討するため、介護職員に対して質問紙調査を実施し、介護現場における介護技術の習得状況の分析を試みた。その結果、介護技術教育に関するいくつかの示唆が得られたので報告する。

## 1.2 研究目的

生活支援技術の内、介護技術に焦点を当て、介護現場における介護福祉士の介護技術の習得状況を明らかにする。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

A県内実習施設（介護老人保健施設及び特別養護老人ホーム）200施設における、今年度就職者および勤務3年目の介護職員とした。

76施設（回収率38%）から返送された調査票の中で、性別、年齢、介護経験年数、資格に欠損のない274名を調査対象者とした。

調査対象者の基本属性では、女性が193名と全体の

表1 基本属性の単純集計 (n=274)

項目	カテゴリー	度数	%
性別	女性	193	70
	男性	81	30
年齢	10代	17	6
	20代	202	74
	30代	34	12
	40代以上	21	8
資格	介護福祉士	171	62
	介護福祉士資格のない者	103	38
介護福祉士の経験年数	今年就職	67	39
	3年目	104	61

表2 資格取得時の介護福祉士養成の目標<sup>1)</sup>

1	他者に共感でき、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につける
2	あらゆる介護場面に共通する基本的な介護の知識・技術を習得する
3	介護実践の根拠を理解する
4	介護を必要とする人の潜在能力を引き出し、活用・発揮させることの意義について理解できる
5	利用者本位のサービスを提供するため、多職種協働によるチームアプローチの必要性を理解できる
6	介護に関する社会保障の制度、施策についての基本的理解ができる
7	他の職種の役割を理解し、チームに参画する能力を養う
8	利用者ができるだけなじみのある環境で日常的な生活が送れるよう、利用者ひとりひとりの生活している状態を的確に把握し、自立支援に資するサービスを総合的、計画的に提供できる能力を身につける
9	円滑なコミュニケーションの取り方の基本を身につける
10	的確な記録・記述の方法を身につける
11	人権擁護の視点、職業倫理を身につける

70%を占め、年齢は、20歳代が202名（74%）と多く、介護福祉士資格保持者は、171名（62%）であった。また、介護福祉士資格保持者のうち、3年目の職員は104名（61%）であり、今年就職した1年目の職員は67名（39%）であった（表1）。

## 2.2 調査方法

### 2.2.1 調査項目

質問紙調査票の作成にあたり、施設の実習指導者研修修了者に対して、「現場が望む介護福祉士像、養成校に期待する技術教育」についてインタビュー調査を実施した。インタビュー調査の結果<sup>8)</sup>と厚生労働省の「新カリキュラムの想定される教育内容の例」<sup>9)</sup>（表2）をもとに介護技術24項目を選択し、調査項目とした。

#### 1) 介護職員の基本属性

基本属性として、性別、年齢、介護福祉士資格の有無、経験年数（1年目、3年目）をあげた。

表 3 想定される教育内容の例<sup>9)</sup>

大項目	介護技術項目
整容行動・衣生活	1) 洗面
	2) 整髪
	3) ひげの手入れ
	4) 爪
	5) 化粧
	6) 口腔の清潔
	7) 衣服着脱
移動・移乗	8) 歩行介助
	9) 車いす介助
	10) 安楽な体位の保持
	11) 体位変換
食事	12) 食事
入浴・清潔保持	13) 入浴
	14) シャワー浴
	15) 全身清拭
	16) 陰部洗浄
	17) 足浴・手浴
	18) 洗髪
排泄	19) トイレ
	20) ポータブルトイレ
	21) 採尿器・差し込み便器
	22) おむつ
睡眠	23) 安眠
終末期	24) 終末期

## 2) 介護技術 24 項目 (表 3) に対する習得状況の評価項目

### 頻度

各介護技術項目を 1 週間行う頻度の平均について、頻繁に行うのを 5 点～ほとんど行わないものを 1 点とする 5 段階評価とした。

### 意義 (目的)

項目に対する意義の理解度について、できている 3 点、どちらともいえない 2 点、できていないを 1 点とする 3 段階評価とした。

\* 以下 ～ も同様の評価基準とした。

### 留意点

項目に対する留意点の理解度

### アセスメント

状況に対応したアセスメントの実施状況

### 手順

項目に対する手順の理解度

### 習得度

項目に対する技術全体の習得状況について、十分に習得できたを 10 点とした 10 段階評価とした。

## 3) 「支援するにあたり必要だと思うもの」について、自由記述欄を設けた。

## 2.2.2 調査方法

2009 年 4 月～5 月に郵送法にて実施

## 2.2.3 倫理的配慮

対象者に研究の主旨および研究目的以外では使用しないことを明記の上、同意を得た。

## 2.3 分析方法

本研究は、SPSS 17.0 for Windows を用いて分析を行った。

介護現場における介護技術 24 項目の状況を把握するために、各頻度の割合を示した。そして、各評価項目間の相関を見るために Spearman の相関分析を行った。また、3 年目の介護福祉士に対して、1 年目 (就職時) と 3 年目の習得状況の差をみるため Wilcoxon 検定を用いて検討した。

同様に、1 年目の介護福祉士を対象に、各評価項目間の相関分析および各技術項目に対してアセスメント、留意点、習得度の相関を検討した。

## 3. 結果

### 3.1 介護職員全体の習得状況

#### 3.1.1 介護技術 24 項目の頻度・意義・留意点・アセスメント・手順・習得度に対する評価 (全体)

図 1 に、各介護技術項目に対する頻度の各評価の割合を示した。多いと評価した割合が最も高い項目は、食事であり、60%を超えた項目は、車いすの介助、トイレ介助、おむつ交換であった。これら 4 項目は留意点、アセスメント、手順、習得度においてもできると評価した割合が高く、上位 7 項目以内を占めていた。また、ほとんど行わないと評価した割合が 70%を超えた項目は、化粧、終末期、採尿器・差し込み便器介助、足浴・手浴、全身清拭であった。これら頻度の少ない項目も意義、留意点、アセスメント、手順、習得度全ての評価項目に対して低い評価を示していた。

#### 3.1.2 頻度・意義・留意点・アセスメント・手順・習得度の相関関係 (全体)

介護技術に対する頻度、意義、留意点、アセスメント、手順、習得度の各評価項目はどのくらいの関連があるのかを調べるため、各項目間に対して Spearman の相関検定を行った。結果、全てに有意な正の相関がみられた。とくに、習得度はアセスメントと最も強い相関がみられた (表 4)。

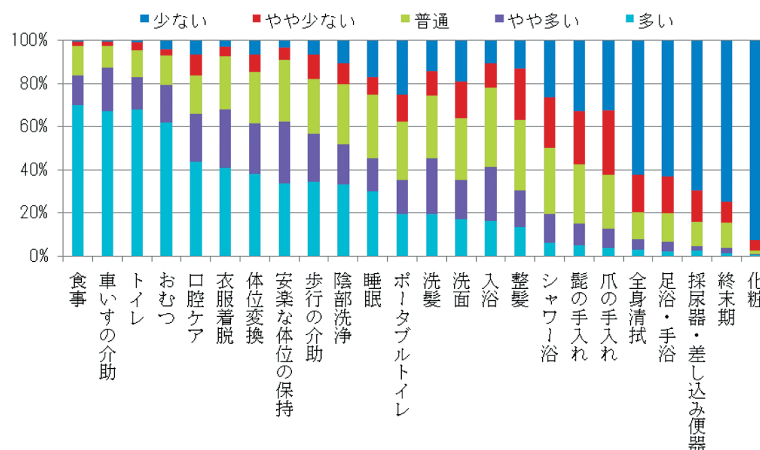


図1 介護技術項目別の頻度 (全体)

表4 項目間の Spearman の相関検定の結果 (全体)

	頻度	意義	留意点	アセスメント	手順	習得度
意義	.301***	1.000				
留意点	.371***	.706***	1.000			
アセスメント	.480***	.582***	.788***	1.000		
手順	.363***	.607***	.799***	.742***	1.000	
習得度	.476***	.536***	.682***	.711***	.674***	1.000

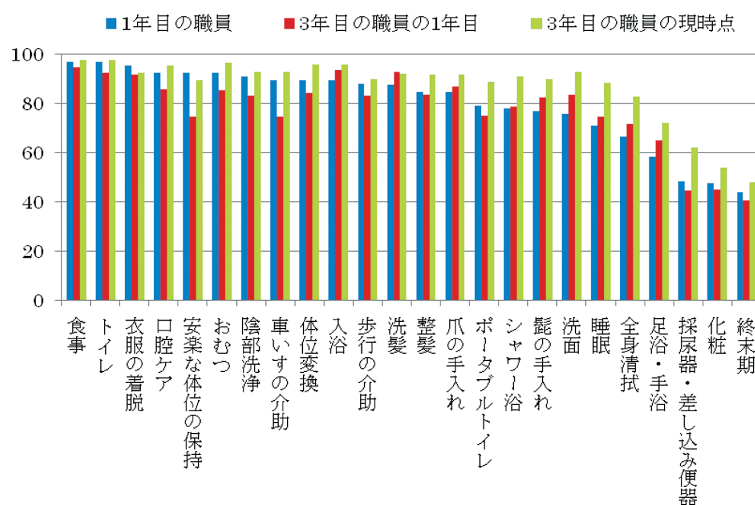
\*\*\*  $p < .001$ 

図2 1・3年目の介護技術項目別の「できた」評価の割合：意義 (介護福祉士) (単位%)

### 3.2 介護福祉士の習得状況

#### 3.2.1 介護技術 24 項目の意義・留意点・アセスメント・手順・習得度に対する評価 (介護福祉士)

1年目および3年目(経験年数1年目と3年目)の介護福祉士資格保持者を対象として、介護技術24項目に対する意義、留意点、アセスメント、手順、習得度について、できたと評価した者の割合を1年目の職員の占める割合が高い順に示した。結果、3年目の

職員は、全項目できると評価した割合が1年目および3年目の職員の1年目に比べて高かった。

意義は、1・3年目ともに80%を超えた項目が半数あり、全体的に高い評価となった。1年目の職員は食事、トイレなど半数以上の15項目が3年目の職員の1年目よりも評価が高かった(図2)。

留意点は、3年目は80%を超えた項目が12項目あったが、全体的に意義よりも評価は低い傾向となった。

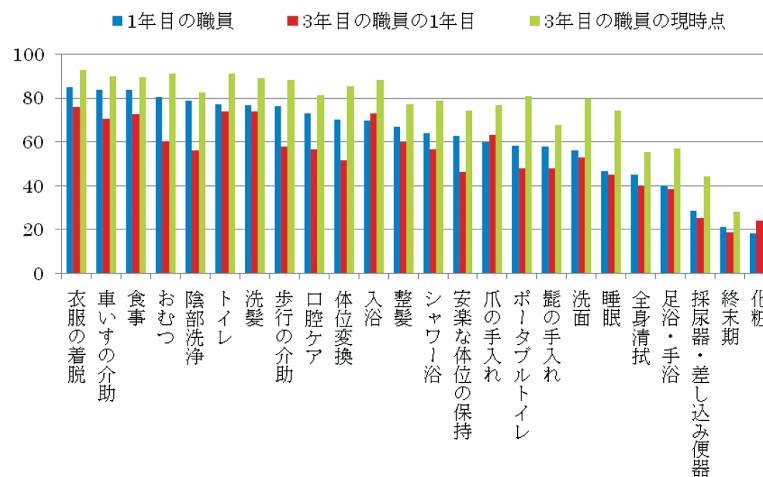


図3 1・3年目の介護技術項目別の「できた」評価の割合：留意点（介護福祉士）（単位％）

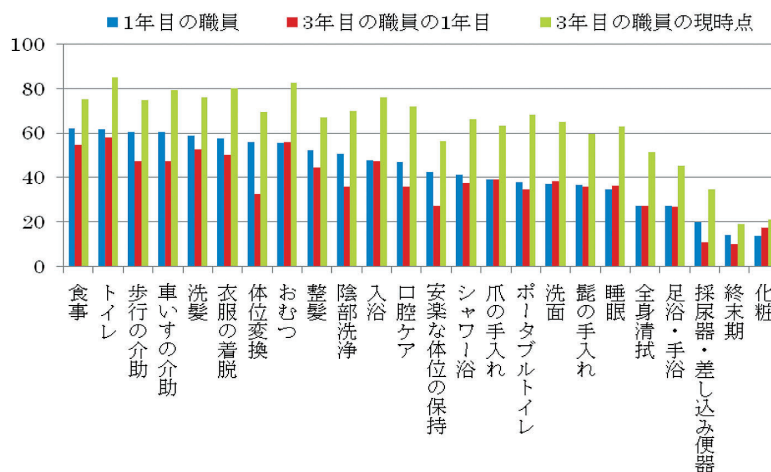


図4 1・3年目の介護技術項目別の「できた」評価の割合：アセスメント（介護福祉士）（単位％）

1年目の職員は、入浴、爪の手入れ、化粧以外の21項目で、3年目の職員の1年目よりも評価が高かった（図3）。

アセスメントは、意義、留意点、手順の中でできると評価した割合が最も低く、最も評価の高い項目は、1年目は食事で60%程度となり、3年目も80%程度のトイレ介助となった。評価の低い終末期は、1・3年目共に割合が20%に満たなかった。1年目の職員は、おむつなど20項目で3年目の職員の1年目よりも評価が高かった（図4）。

手順について1年目は、60%を超えた項目が車いすの介助など半数に及んだ反面、化粧や終末期は20%に満たなかった。1年目の職員は、車いすの介助など21項目で3年目の職員の1年目よりも評価が高かった（図5）。

習得度は、10段階評価のうち9・10と評価した者

の割合が、30%を超えた項目は3年目では4項目、1年目では車いすの介助のみに留まった（図6）。評価の低い項目となった足浴・手浴、全身清拭、化粧、採尿器・差し込み便器、終末期の5項目は、意義、留意点、アセスメント、手順においても低い傾向を示した。

3.2.2 1年目と3年目の経験年数による介護技術24項目の意義・留意点・アセスメント・手順・習得度に対する比較

3年目の介護福祉士資格保持者を対象に、1年目から3年目へと経験年数を経ることで、介護技術24項目の習得状況がどのように成長するのか比較検討するため、各評価項目についてWilcoxon検定を行った。結果、習得度は化粧以外の23項目にすべてに有意差があり、3年目の職員は1年目から成長していることが明らかとなった。有意差のある項目数について、意義では入浴、爪の手入れなど10項目、留意点では衣



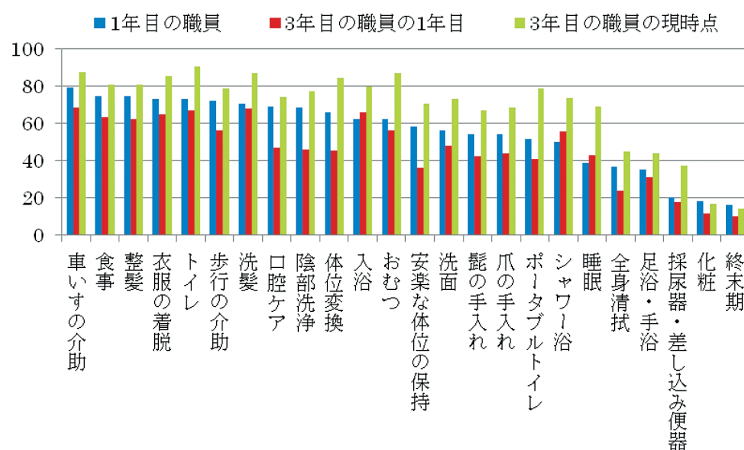


図5 1・3年目の介護技術項目別の「できた」評価の割合：手順（介護福祉士）（単位％）

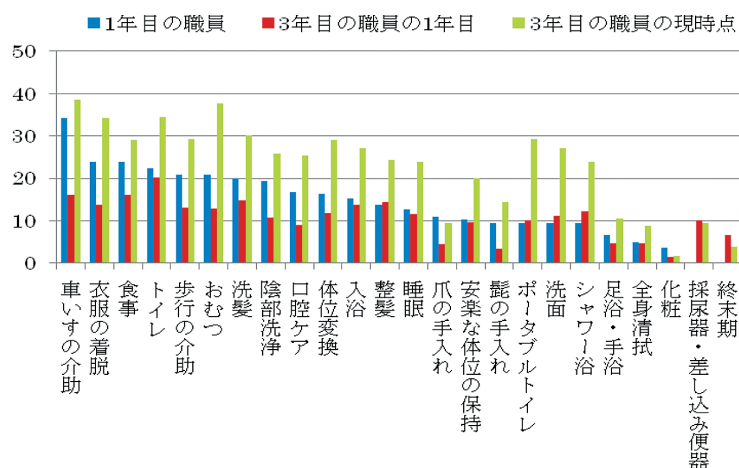


図6 1・3年目の介護技術項目別の「9 - 10」評価の割合：習得度（介護福祉士）（単位％）

服の着脱、洗髪など14項目、アセスメントではトイレ介助、おむつ交換など19項目、手順では車いすの介助、洗髪など16項目となった。アセスメントは、習得度に次いで有意差のある項目数が多く、最も少ないのは意義であった。アセスメントに有意差のある項目は習得度においても全て有意差がみられた。また、技術項目で意義・留意点・アセスメント・手順・習得度の全てに有意な差がみられたのは、入浴、シャワー浴、睡眠、採尿器・差し込み便器、洗面、爪の手入れ、足浴・手浴の7項目あり、反対に全てに有意差が見られないのは化粧であった（表5）。

### 3.2.3 頻度・意義・留意点・アセスメント・手順・習得度の相関関係（1年目の介護福祉士）

1年目の介護福祉士資格保持者を対象に、介護技術に対する頻度、意義、留意点、アセスメント、手順、習得度の評価項目にどのくらいの関連があるのかを調べるため、項目間に対して Spearman の相関検定を

行った。結果、頻度以外全てに有意な正の相関がみられた。とくに、習得は手順や留意点と強い相関があり、頻度とは強い相関関係は見られなかった（表6）。

## 4. 考察

### 4.1 介護現場における介護技術の状況

介護現場で実施頻度の高い上位項目は食事、車いすの介助、トイレ介助、おむつ交換であった。これらは、1日の生活の中で複数回実施する項目であり、とくに車いす介助は、移動手段としての必要性が高い。厚生労働省の介護サービス施設・事業所調査結果<sup>10)</sup>によると、愛知県の介護老人福祉施設と介護老人保健施設の入所者の要介護度の平均は、3.62と3.3であり、車いす介助を必要とする対象者が多いことを反映した結果と思われる。反対に、頻度の低い項目である化粧や終末期に対しては、日常生活の援助場面は少なく、1日1回もしくはそれ以下の頻度で行われる入浴やシャワー

表5 3年目の介護福祉士の1・3年時の評価に対する Wilcoxon 検定の結果

	意義	留意点	アセスメント	手順	習得度
入浴	*	**	***	**	***
ポータブルトイレ		**	***	***	***
おむつ		**	***	***	***
衣服着脱		*	**	**	***
シャワー浴	*	*	**	**	***
トイレ		**	**	***	***
睡眠	*	***	**	***	***
採尿器・差し込み便器	*	**	*	***	***
洗髪		**	**	***	**
洗面	**	***	***	*	**
爪の手入れ	*	**	***	*	**
足浴・手浴	**	**	**	***	**
口腔ケア		*	***		**
体位変換	**	**		***	***
全身清拭	*		***	*	*
車いすの介助			*	*	*
髭の手入れ	**		***		*
整髪			*		*
陰部洗浄			**		*
食事			*		*
安楽な体位の保持				*	**
歩行の介助					*
終末期					*
化粧					

\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$  \*\*\*  $p<.001$ 

表6 評価項目間の Spearman の相関検定の結果 (1年目の介護福祉士)

	頻度	意義	留意点	アセスメント	手順	習得度
意義	.233	1.000				
留意点	.268	.575***	1.000			
アセスメント	.361*	.522***	.726**	1.000		
手順	.245	.590***	.857***	.740***	1.000	
習得度	.337*	.529***	.783***	.676***	.806***	1.000

\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$  \*\*\*  $p<.001$ 

浴、爪の手入れ、採尿器・差し込み便器なども、低い傾向を示した。

また、意義、留意点、アセスメント、手順および習得度における評価の高い項目と低い項目は類似しており、頻度の高い項目ほどアセスメントや習得度ともに評価が高くなる傾向を示した。西川<sup>11)</sup>は、介護職の専門性を向上させるには、公式な教育訓練による演繹的学習などよりは、実践の場による知識習得が重要であるし、反芻学習を中心とした内省の促進と共同的な対話と通じた参加型学習によって伸びていく傾向が見出された、と述べている。本研究も介護職員は、3年目を迎えるまでに、介護技術の意義、留意点、アセスメント、手順および習得度全ての評価が向上しており、現場で実践を繰り返す中で成長する様子が伺えた。

#### 4.2 介護福祉士の習得状況

介護福祉士も3年目を迎えるまでに、介護技術の意義、留意点、アセスメント、手順および習得度の評価が全て向上していることから、現場で実践を繰り返す中で全体的に成長する様子が伺えた。1年目と3年目の経験年数の比較において、介護技術24項目に対して有意な差がみられたのは、意義は10項目、留意点は14項目、アセスメントは19項目、手順は16項目、習得度は23項目とばらつきが見られた。意義は、一般的な知識として養成課程で学ぶ内容であるため、1年目でも習得度が高く有意差は半分以下にとどまったといえる。留意点は、意義と同じ基礎的な知識であるが、おむつ介助、洗面など個別性の高い項目に対して有意差がみられた。アセスメントは、知識や利用者の状況、環境などをふまえた上で適切な支援方法を導く

思考過程である。そのため、意義や留意点に比べて1年目の職員の評価は低く、3年目との有意差も多くなったと考えられる。また、習得度は意義、留意点、アセスメントおよび手順など全てを習得した上での評価となるため、経験年数による差が最も著明となった。

介護技術項目について、全ての評価項目で有意差がみられなかった化粧は、新カリキュラムからの学習内容であり、介護現場において日常的に実施されていることが少ない項目である。そのため、経験年数に関わらず全ての評価項目で低い傾向を示した。また、終末期に対しては、施設での看取り件数が増え、その必要性は高まってきているが、実際の頻度は低いため、同じく経験年数に関わらず全ての評価項目で低い傾向を示したといえる。反対に、頻度の高い食事、安楽な体位の保持、歩行の介助、陰部洗浄や整髪などは、実践を繰り返す中、1年目で評価が高くなったため、3年目との有意な差が得られにくくなったと言える。

#### 4.3 介護福祉教育における介護技術の教育に向けて

介護福祉士養成課程で学ぶ基礎的な知識としての意義や留意点は習得しやすく、卒後1年目でもその評価は高い傾向を示した。また、1年目から3年目に至る中、実践を通して、各評価項目が成長するさまが明らかとなった。しかし、対象となる利用者の状況に対応するための思考過程であるアセスメントの評価は低い。1年目の介護福祉士は、習得度に対してアセスメントよりも留意点や手順との相関が高く、現場の業務を覚えたり慣れることを優先している傾向が伺える。知識や理論と実践を統合するための思考過程として、アセスメントは重要であり、新カリキュラム<sup>12)</sup>においてもその重要性はあげられている。介護技術教育において、現場で実践しやすいアセスメント能力をどのように育むか、創意工夫することが一層求められる。

介護技術項目について、頻度の高かった食事、車いすの介助、トイレ、おむつ介助などは介護実習でも同じく頻度の高い項目といえる。そのため、効果的な実習が行えるよう、現場で応用できるよう基礎的な技術習得は必要不可欠な項目となる。また、習得度など全てにおいて低い評価であった終末期は、その場面の対応だけでなく、介護者の死生観なども問われる項目である。終末期医療に対して、安心できる医療や介護の提供体制の整備が強く求められているという現状<sup>13)</sup>の

もと、介護現場では看取り加算が導入され、質の高い終末期ケアを求められることになった。自由記述においても、終末期に対する学習ニーズが高い<sup>14)</sup>ことから、教育としても系統立てた学びが必要な項目と言える。

#### 5. まとめ

今回、介護技術の学習内容の検討までは至らなかったが、介護現場における介護福祉士の介護技術習得の状況を把握できた。課題として、客観的な評価のあり方や施設内教育等介護技術の習得に関わる要因の検討もあげられる。さらに、介護技術を習得し実践するために、単なる技術教育ではなく、専門的な知識や技術とともに、人としての誠実さや真摯な姿勢など情意領域を育むことも必須である。

それらを踏まえた上で、今後、介護技術教育を検討するための基礎資料として役立てていきたい。

#### 謝辞

本研究を進めるにあたり、質問紙調査にご協力いただきました職員の方々に感謝いたします。また、研究をまとめるに際して、ご指導いただきました久世淳子教授に深謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 厚生労働省：新しい介護福祉士養成カリキュラムの基準と想定される教育内容の例。社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて、(2008)。
- 2) 文部科学省：看護学教育の在り方に関する検討会報告書。(2002)。
- 3) 文部科学省：看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標（看護学教育の在り方に関する検討会報告）。(2004)。
- 4) 文部科学省：看護基礎教育の充実にに関する検討会報告書。(2007)。
- 5) 浅川和美他：看護基礎教育における看護技術教育の検討 看護系大学生の臨地実習における漢語技術経験状況と自信の程度。茨城県立医療大学紀要，VOI, 13, (2008), pp. 57-67。
- 6) 深田順子他：看護実践能力に対する学生による縦断的自己評価から見た大学における看護技術教育の検討。愛知県立看護大学紀要，Vol, 14, (2008), pp.



73-84.

- 7) 日本生活支援学会：介護保険施設における介護福祉士の配置の評価に関する研究．平成 21 年度日本生活支援学会総会及び第 1 回研究大会，(2009)，pp. 12-15.
- 8) 高木直美，武田啓子：生活支援技術教育の構築に向けて - 介護職員への意識調査を試みて - ．日本福祉大学専門学校紀要 第 10 号，(2010)，pp. 1-8.
- 9) 1) 前掲書．
- 10) 厚生労働省：総括表 第 1 章介護保険施設数 - 定員 (病床数) - 9 月末日の状況 (在所者数 - 利用率 - 平均要介護度) - 常勤換算従事者数．平成 19 年介護サービス施設・厚生労働省統計一覧事業所調査結果の概況，(2007)，p. 1
- 11) 西川真規子：ケアワーク支える力をどう育むか，日本経済新聞出版社，(2009)，pp. 179-199.
- 12) 1) 前掲書．
- 13) 厚生労働省：終末期医療に関する調査等検討会報告書．(2006)．
- 14) 9) 前掲書．

#### 参考文献

- 1) 介護福祉士養成講座編集委員会：新・介護福祉士養成講座 生活支援技術 ．中央法規，東京 (2009-2)
- 2) 介護福祉士養成講座編集委員会：新・介護福祉士養成講座 生活支援技術 ．中央法規 (2009-2)